様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０８５６６

研究課題名（和文）二職種間意思決定プロセスを円滑にする教育プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and assessment of a nurse-doctor decision-making process training

研究代表者
杉本　なおみ（SUGIMOTO, Naomi）

慶應義塾大学・看護医療学部（藤沢）・教授

研究者番号：７０２８８１２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：面接調査（医師20名・看護師22名）では、医師から①報告・確認が不適切②処置の優先度の理解が異なる③患者の個別性に配慮した治療を行いたいのに即断を求められるとの報告が見られた一方、看護師は①指示がない・不適切②処方変更・退院指示が遅い③非倫理的言動があるとの報告が見られた。
　続いて、上記144事例に基づき設計した連携研修（医師・看護師各21名）を実施・評価した。連携能力自己評価は受講前＜受講直後＜受講１～３ヶ月後の順に高かった。研修に関しては、他参加者の意見を知る機会、主体的な参加、実践例の活用において高評価を得た一方、時間配分、臨床との関連性、目的説明、などの評価が低かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
既存の職種間連携教育研究の多くが、医療系学生へのアンケート調査などから得られた知見に基づいて設計され、その効果測定も卒前教育の枠組みの中で行われているのに対し、本研究では現職の看護師・医師へのトレーニングおよび事後の効果測定・インタビュー調査を実施した。これにより、既存のトレーニング・研修よりさらに実践的な内容・方法による連携教育が可能になると予想される。さらには、不適切な協働を原因とする医療職の「燃え尽き症候群」や離職を減らすことが期待できる。また患者や家族にとっては、看護師・医師間の円滑な連携により、より適切な治療や療養生活が可能となる。

研究成果の概要（英文）：Twenty doctors and twenty-two nurses participated in the interview on interprofessional work (IPW). Doctors reported many incidents where: a)nurses' report / check is inadequate, b) nurses have different priorities over various procedures, or c) nurses demand immediate decisions when doctors want to wait for patients' reactions / responses to certain procedures. Nurses, in contrast, mainly reported cases in which: doctors a) fail to make prompt / adequate requests, b) are late in changing prescriptions or permitting discharge, or c) conduct unethical behavior.
　Twenty-one each of doctors and nurses participated in an PW training designed with the 144 episodes reported above. Self-report on IPW competence went up from "prior to training" to " immediately past training" and yet to "1-3 month(s) after training." The program evaluation was high for interactive designs and realistic examples, but low for time management, applicability in actual practice or clarity of training goals.

研究分野：医療コミュニケーション学

キーワード：多職種連携　医師・看護師関係　コミュニケーション教育

１．研究開始当初の背景

医療現場における多職種連携教育が盛んになる一方(大嶋 2009)、「異なる職種の医療職に対し、 単に協働の利を説いたり、接触場面を増やしたりするだけでは、実際の協働能力は向上しない」ことが明らかになってきた(Mohaupt, Soeren, Andrusyszyn, et al, 2012)。例えば医師が、多職種により構成される医療チームに加わる際、複数職種間の(multi-professional)連携を瞬時に習得すると 期待することには教育学的に無理がある。

実際には「対看護師」「対薬剤師」「対作業療法士」など、まず自分とそれ以外の職種の「二職種間(bi-professional)連携」における勘所を一つずつ体得し、それを徐々に拡大適用することで 医療チームの一員として機能する術を身につけるという段階を経ることが考えられる。そこで我々は「二職種間連携→多職種間連携」という学習モデルを提唱し、多職種間連携の前 提としての二職種間連携における「勘所」を「二職種間連携のクリティカルポイント」と呼ぶ。

２．研究の目的

多職種連携教育の隆盛に比して、実践場面での協働能力が期待されるほど向上しない(Reeves, Zwarenstein, & Goldman, 2008)背景には、この「二職種間連携→多職種間連携」という段階を踏まず、一気に「多職種間連携」の方法を身につけることを目標に設定しているという要因が存在する可能性は否めない。したがって本研究では、「二職種間連携のクリティカルポイント」事例を収集し、それを乗り越える知識・能力の習得を学習目標とするプログラムを設計し、その効果を検証する。

３．研究の方法

実際の現場でチーム医療に従事する医師・看護師を対象とする面接調査を行い、他職種との協働に際し困難に感じる場面に関する情報を収集する。この中から二職種間連携のクリティカルポイント(例:医師→看護師の口頭指示)を抽出し、教育により改善可能な事象・問題(例: お互いの法的権限に関する認識不足)とそれ以外の事象・問題(例:医療法上の制約)に分類する。 前者をテーマとする体験・参加型教育プログラムの設計・試行を経て、改良されたプログラムの効果測定を行う。

４．研究成果

面接調査（医師 20 名・看護師 22 名）では、医師から①報告・確認が不適切②処置の優先度の理解が異なる③患者の個別性に配慮した治療を行いたいのに即断を求められるとの報告が見られた一方、看護師は①指示がない・不適切②処方変更・退院指示が遅い③非倫理的言動があるとの報告が見られた。

続いて、上記 144 事例に基づき設計した連携研修（医師・看護師各 21 名）を実施・評価した。連携能力自己評価は受講前＜受講直後＜受講１～３ヶ月後の順に高かった。研修に関しては、他参加者の意見を知る機会、主体的な参加、実践例の活用において高評価を得た一方、時間配分、臨床との関連性、目的説明、などの評価が低かった。

〈引用文献〉

① Mohaupt, J., van Soeren, M.. Andrusyszyn, M., et al. (2012). Understanding interprofessional relationships by the use of contact theory. Journal of Interprofessional Care, 26:370-375.

② Reeves, S., Zwarenstein, M., & Goldman, J. (2008). Interprofessional education: effects on professional practice and health care outcomes. Cochrane Datebase of Systematic Reviews, 1.

③ 大嶋 伸雄. (2009). 保健医療福祉系大学におけるインタープロフェッショナル教育(IPE)の認知度 と今後の発展性に関する全国調査. 保健医療福祉連携 . 1(1), 27-34.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 5 件）

① 酒井郁子・藤沼康樹・杉本なおみ・大西弘高 他 医師と看護師が乗り越えるべきコミュニケーション上のクリテイカルポイント 第 7 回日本プライマリ・ケア連合学会関東甲信

越ブロック地方会　シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）第７回日本プライマリ・ケア連合学会　千葉県千葉市（TKP ガーデンシティ千葉）　2018 年 11 月 18 日

② 杉本なおみ、酒井郁子、藤沼康樹、大西弘高　医師・看護師間意思決定プロセスを円滑にする教育プログラム開発に向けた基礎調査：クリティカルポイント場面での会話の過程と帰結　第 10 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会　ポスター（一般）　日本保健医療福祉連携教育学会　千葉県成田市（国際医療福祉大学）2018 年 9 月 10 日

③ 杉本 なおみ・酒井郁子・藤沼康樹・大西弘高　医師・看護師を対象とする連携能力教育プログラムの開発と評価　第 50 回日本医学教育学会　口頭（一般）日本医学教育学会　東京都文京区（東京医科歯科大学）2018 年 8 月 4 日　京都府京都市（京都大学）

④ 杉本なおみ・酒井郁子・藤沼康樹・大西弘高　医師・看護師間連携能力の鍵を握る「クリティカルポイント」事例　第 9 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会　日本ヘルスコミュニケーション学会　2017 年 9 月 16 日

⑤ 杉本なおみ・酒井郁子・藤沼康樹・大西弘高　二職種間意思決定プロセスを円滑にする教育プログラムの開発と評価（１）医師・看護師間連携のクリティカルポイント調査　第 9 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会　口頭（一般）　日本保健医療福祉連携教育学会　昭和大学（東京都品川区）2016 年 8 月 21 日

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
1 杉本 なおみ　医療コミュニケーション学とは～医師・看護師間連携教育研究を例に～ 慶應義塾大学看護医療学部　看護ベストプラクティス研究開発・ラボ　第６回研究報告会 口頭（招待・特別）　慶應義塾大学看護医療学部　看護ベストプラクティス研究開発・ラボ 東京都新宿区（慶應義塾大学）2019 年 1 月 28 日

2 杉本 なおみ　多職種連携のためのコミュニケーション　第 19 回北日本看護学会学術集会 口頭（招待・特別）　北日本看護学会　宮城県仙台市（宮城大学大和キャンパス）2016 年 9 月 10 日

3 杉本 なおみ　多職種連携教育用ゲーム “FOOD TALK” 第 8 回日本医療教授システム学会総会 シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）　日本医療教授システム学会 東京都新宿区（東京医科大学病院）2016 年 3 月 3 日

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：大西　弘高
ローマ字氏名：(ONISHI, Hirotaka)
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院医学系研究科（医学部）
職名：講師
研究者番号（8桁）：90401314

(2)研究協力者
研究協力者氏名：酒井　郁子
ローマ字氏名：(SAKAI, Ikuko)

研究協力者氏名：藤沼　康樹
ローマ字氏名：(FUJINUMA, Yasuki)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。